2004.06.28 ～ 06.30 更新

「忘草（萱草)」と「不忘草（紫苑)」

萩原　義雄

仏教説話集『今昔物語集』巻三十一・第二十七、兄弟二人殖萱草ト紫苑ヲ語に、

今昔、□　ノ国□　ノ郡ニ住ム人有ケリ。男子二人有ケルガ、其ノ父失ニケレバ、其ノ二人ノ子共戀ヒ悲ブ事、年ヲ経レドモ忘ル事无カリケリ。

昔ハ失ヌル人ヲバ墓ニ納メケレバ、此ヲモ納メテ、子共祖ノ戀シキ時ニハ打具シテ彼ノ墓ニ行テ、涙ヲ流シテ、我ガ身ニ有ル憂ヘヲモ歎ヲモ、生タル祖ナドニ向テ云ハム様ニ云ツヽゾ返ケル。

而ル間、漸ク年月積テ、此ノ子共公ケニ仕ヘ私ヲ顧ルニ難堪キ事共有ケレバ、兄ガ思ケル様、「我レ只ニテハ思ヒ可□　キ様无シ。萱草ト云フ草コソ、其レヲ見ル人思ヲバ忘ルナレ。然レバ彼ノ萱草ヲ墓ノ邊ニ殖テ見ム」ト思テ、殖テケリ。

其ノ後、弟常ニ行テ、「例ノ御墓ヘヤ参リ給フ」ト兄ニ問ケレバ、兄障ガチニノミ成テ不具ズノミ成ニケリ。然レバ弟、兄ヲ「糸心疎シ」ト思テ、「我等二人シテ祖ヲ戀ツルニ懸リテコソ、日ヲ暗シ夜ヲ明シツレ。兄ハ既ニ思ヒ忘レヌレドモ、我ハ更ニ祖ヲ戀ル心不忘ジ」ト思テ、「紫苑ト云フ草コソ、其ヲ見ル人心ニ思ユル事ハ不忘ザナレ」トテ、紫苑ヲ墓ノ邊ニ殖テ、常ニ行ツヽ見ケレバ、弥ヨ忘ルヽ事无カリケリ。

此様ニ年月ヲ経テ行ケル程ニ、墓ノ内ニ音有テ云ク、「我レハ汝ガ祖ノ骸ヲ守ル鬼也。汝ヂ怖ルヽ事无カレ。我レ亦汝ヲ守ラムト思フ」ト。弟此ノ音ヲ聞クニ、極テ怖シト思ヒ乍ラ、荅ヘモ不為デ聞居タルニ、鬼亦云ク、「汝ヂ祖ヲ戀ル事、年月ヲ送ルト云ヘドモ、替ル事无シ。兄ハ同ク戀ヒ悲テ見エシカドモ、思ヒ忘ル草ヲ殖テ、其レヲ見テ既ニ其ノ験ヲ得タリ。汝ハ亦紫苑ヲ殖テ、亦其レヲ見テ其験ヲ得タリ。然レバ我レ、祖ヲ戀フル志ノ勲ナル事ヲ哀ブ。我レ鬼ノ身ヲ得タリト云ヘドモ、慈悲有ルニ依テ、物ヲ哀ブ心深シ、亦日ノ内ノ善悪ノ事ヲ知レル事明カ也。然レバ我レ、汝ガ為ニ、見エム所有ラム、夢ヲ以テ必ズ示サム」ト云テ、其ノ音止ヌ。弟泣々ク喜ブ事无限シ。

其ノ後ハ日ノ中ニ可有キ事ヲ夢ニ見ル事違フ事无カリケリ、身ノ上ノ諸ノ善悪ノ事ヲ知ル事暗キ事无シ。此レ祖ヲ戀ル心ノ深キ故也。

然レバ、喜キ事有ラム人ハ紫苑ヲ殖テ常ニ可見シ、憂ヘ有ラム人ハ萱草ヲ殖テ常ニ可見シトナム語リ傳ヘタルトヤ。

とあって、忘れることのできる草＝「萱草」と忘れることのない草＝「紫苑」とを二人の兄弟を通して描写する譚である。この二つの「草花」を対象として兄弟の思いを説明することで、嬉しさと憂いの身を抱く人の心の機微を伝えているのであり、この説話の「忘れる、忘れず」の思想起源を考察してみたい。

まず、萱草を「忘れ草」とする思想の起源は、下記に示す古辞書源順『倭名類聚抄』な

どの引用からして中国に依拠すると見ておきたい。

これに対し、紫苑を「不忘草」とする思想の起源は、本邦からではないかというのが今般の試論内容である。

奈良時代の『萬葉集』巻四、「萱草」⇔「鬼乃志許草（おにのしこぐさ）」と巻十二、「萱草」⇔「鬼之志許草（おにのしこぐさ）」とに、見えている哥に対象表現の植物花が描かれている。

大伴宿禰家持贈坂上家大嬢歌二首

萱草吾下紐爾著有跡鬼乃志許草事二思安利家理

わすれ草わがした紐につけたれどしこのしこ草ことにしありけり

萱草 垣毛繁森 雖殖有 鬼之志許草 猶戀尓家利

わすれ草、垣もしみみに、植ゑたれど、醜（しこ）の醜草（しこくさ）、なほ恋ひにけり

この『萬葉集』では、「萱草」に対応する花として「鬼乃志許草」「鬼之志許草」で、これを「しこのしこくさ」と訓読するのが『萬葉集』テキストの通例である。だが、これを「おにのしこぐさ」と後世では訓じていて、このことは、下記に示す謡曲『大江山』などの文献作品で知られるのであり、なぜ、中世歌学書に於いて「しこ」と訓読しないのかが問われてくるであろう。これは萬葉研究における訓読法への見直しでもある。そして、この花の名が果たして、「紫苑」なのかを明らかにしていくことも必要であるまいか。時代は降って平安時代の勅撰和歌集『古今和歌集』・物名に、「しをに」が次のように表出する。

しをに

よみ人しらず

0441 ふりはへていざふるさとの花みんとこしを　にほひぞうつろひにける

ここでは「紫苑」を「しをに」と訓じ、「をにのしこくさ」の「をにし」を上下逆に訓むと「しをに」となるのだが、「苑（woni）」と「鬼（woni）」を懸け、その排列の転置法に依拠する名なのか、またこの當時そのような転置の技法がこの花の名に応用されていたのかは明確でないところでもある。そして、「をにのしこくさ」なる語は、平安時代の和歌集のなかで未使用となっていることも指摘せねばなるまい。

同じく、平安時代の歌物語である『伊勢物語』百段に、

むかし、男、後涼殿のはさまを渡りければ、あるやむごとなき人の御局より、忘れ草を、しのぶ草とや言ふとて、いださせたまへりければ、たまはりて、

忘れ草生ふる野辺とは見るらめどこはしのぶなりのちも頼まん

むかし、おとこ、後涼殿のはさまを渡（わた）りければ、あるやむごとなき人の御局（つぼね）より、「忘（わす）れ草（ぐさ）を忍（しの）ぶ草（ぐさ）とやいふ」とて、いださせ給（たま）へりければ、たまはりて、

忘草生（お）ふる野（の）べとは見るらめどこは忍（しの）ぶなり後（のち）もたのまん

とし、また、『大和物語』には、

又、在中将、内にさぶらふに、宮すん所の御方より、忘れ草をなむ「これは何とかいふ」とてたまへりければ、中将、

わすれぐさおふる野邊とはみるらめどこはしのぶなり後もたのまん

となむありける。同じ草を忍ぶ草、忘れ草といへば、それよりなむよみたりける。
と、「男」を「在中将(在原業平)」とし、歌物語の構成を変じてはいるが同じ歌をもって表出しており、さらに、『和泉式部集』には、「人の許に、忘れ草しのぶ草包みてやるとて」とあり、「忘れ草＝萱草」でなく、「忘れ草＝しのぶ草」へと変容継承されていることが茲に確認できるのである。王朝貴族のなかでは、現実直視というよりは、イメージ化された花の名前であって、その場に咲ける花でないことが伺える。そして、対象の花である「忘れず草」である「紫苑」＝「鬼の志許草」については、「忘れず」の思想がないかの如く、全くといってよいくらい表出して来ないのも事実である。

これが平安末期の仏教説話集である『今昔物語集』の上記に掲げた、説話を媒介として、「萱草」と「紫苑」とが対照的に表出するに伴って、平安末期の邦人、源俊頼の『髄脳抄』（一一一五年頃。『俊頼口傳』のことか、後世の『古名録』に引用される）のなかに、「紫苑」を「鬼のしこ草」とし、「されば志許草とは、心ざしのもとのくさとは書なり」とその字面による訓読説が見え始めるのである。これと同じく歌学書では、藤原清輔の『奥儀抄』、顯昭の『袖中抄』、藤原爲家の『詠歌一體』にも、「牡丹、ふかみ草。紫苑、鬼のしこ草。蘭、ふぢばかま。か樣にこゑのよみの物は、異名ならずばかなふべからず。歌にも聲のよみあまたあり」にも同じく継承されていることが知られるのである。このように、平安末期に始まる中世の歌学書にあっては、『萬葉集』の「鬼乃志許草」「鬼之志許草」を「おにのしこぐさ」と訓み、そして「紫苑」の花の異名とする歌学の流れが脈々と伝承されていることが茲に指摘できるのである。

さて、鎌倉時代の軍記物語『平家物語』巻第十二・大原御幸には、
女院の御庵室を御覧ずれば、垣には蔦はひかかり、忍草まじりの忘れ草、瓢箪しばしばむなしく、草顔淵が巷にしげしと覚え、庭には蓬生ひしげり、藜藿深く鎖して、雨原憲が枢をうるほす共言つつべし。
とあって、上記王朝思考の現実直視から離れたイメージ化された「忍まじりの忘れ草」が描写されているだけで、忘れずの「紫苑＝鬼のしこ草」は見えない。これが表出するのは、今のところ、室町時代の謡曲『大江山』に、
いざいざ酒を呑もうや。いざいざ酒を呑もうよ。扨お肴は何々頃しも秋の山草。桔梗苅萱われもこう。紫苑といふは何やらん。鬼のしこ草とは。誰が附けけし名成るぞ。
というのが、上記の歌学書を受けての引用表現となっている。このように見てくると、『今昔物語集』の説話蒐集そして編集時期からして、一一〇〇年以前に「忘草」の思想の逆である「不忘草」の思想が本邦において派生していたのであり、『今昔物語集』を基盤として始まったこの思想は、室町時代に至るまで解釈内容は少しも変容していないことが知られるのである。
次に、安楽庵策伝著『醒睡笑』に、
一　石州銀山にての事そとよ。常により合ぬる者。一人入道し。法名を芝恩とつく。友達に鈍なる男ありて。つゐに芝恩と云名をわすれ。お禅門お禅門とよふ。禅門腹立し。しをんといふ草あり。みられた事はなきか。いやまたみぬと。さらは見せんとてつれたち。ある人の前栽へ行。しをんと。しやかと。花さきてありしを。これはしをん。これはしや

かといふとをしへ。此しをんの花の名を。よくおほゆれは。わか名と同しことそ。わすれ給ふなと。いひふくめてかへりぬ。件の男領掌しけるか。又二三日ありて後よりあひし時。しをんはうちわすれ。さてもしやか。お久しいと申たり

とあって、「しをん」の花を見れば、絶対忘れないという思想をここで援用しているのだが、この花を見せても「忘れず」の功能がない話しが茲に紹介されている。この頃になると、「不忘草（紫苑）」の思想は、言い伝えとはいえ、単なるまやかしでしかないという考え方が生まれてきているのかも知れない。

《追補》

江戸時代における引用表現

貞心尼編『はちすの露』（天保六年成）天保元年五月大風の吹きし時のうたに、

　わがやどの、かき根にうゑし、あき萩や、一もとすゝき、をみなへし、しをに、なでしこ、ふぢ袴、鬼のしこ草、ぬきすてゝ、水をはこびて、日おひして、育てしからに、たまほこの、道もなきまで、はびこりぬ。

滝沢馬琴編、読本『南總里見八犬傳』第九輯巻之二十九口絵「わすれ草わすれすに買へ大津画の鬼のしこ草もあふミ野の花　　半閑人」

１，わすれぐさ【萱草】

古辞書：十巻本『倭名類聚抄』（九三四年頃）一〇「萱草　兼名苑云萱草一名忘憂〈萱音喧　漢語抄云和須礼久佐〉」・『色葉字類抄』「萱草（クワン 俗）　ワスレクサ一名忘憂草」〔植物・上６９オ①〕・『下學集』「萱草（ワスレグサ）クワンザウ　或ル説ニ云フニ忘ルヽレ憂（ウレイ）ヲ草トハ也」〔草木門１２４⑥〕・廣本『節用集』「萱草（ワスレグサ）　毛詩作レ諼ニ。孔子曰諼ノ訓ハ忘ナリ。非ニ草ノ名ハ。尓雅曰。諼ハ忘也。季子引ニ稽叔夜カ養性論ハ曰合歓蠲レ怒。諼草忘憂復言レ諼ト者。本ニ於此ハ。玉篇ニ作レ藿（ケン）ニ。神農經ニ曰。中藥養性ニ。謂ル合歓蠲レ怒。萱草忘憂也。或云ニ忘憂草（ハウユウサウ）トハ也」〔草木門２３５①〕

２，しおん【紫苑】

古辞書：『色葉字類抄』「紫苑　シヲン又ノシ。紫蒨　同七見」〔植物・下６８ウ⑥〕・『下學集』「紫苑（シヲン）」〔草木門１２５③〕・廣本『節用集』「紫苑（シヲン）ムラサキ、エン・ソノ」〔草木門９１５①〕

異名：返魂草　還魂草　反魂草

以上